

「マーケットの浅読み・深読み」

発行・編集：FXニュースレター

執筆担当：斎藤登美夫



◆◆◆ No.0879 ◆◆◆

26/02/18

【 為替市場で取り沙汰される思惑 2 選 】

8 日に実施された衆院選は、高市自民党が予想を大きく超える「圧勝」。しかし、視点を為替市場へと転じると、一部で期待の高かった円安再進行などの「高市トレード」は不発に終わった感を否めない。むしろドル/円にスポットを当てれば、衆院選前の 156-157 円から 152-154 円へと、逆にドル安・円高が進行しているほどだ。

そうしたなか、為替市場において幾つか気になる思惑が取り沙汰されている。今回の当レターでは、そんな「気になる思惑」を 2 つほど取り上げてみたいと思う。

<< 政府・財務省の「レートチェック」再び!? >>

先週など、これまで当レターでも報じているように、「日本の政府・財務省が 1 月 23 日にレートチェックを行った」とされている。1 月 28 日付けで、とくに詳しくレポートしているので、関心のある方はバックナンバーを参考にいただきたい。

ただし、過去に報じなかった内容を今回ひとつだけ補足しておく、参加者のごく一部で別途取り沙汰されていた「23 日の円買い実弾介入」観測は、そのうち財務省が発表したデータで正式に否定されている。つまり、1 月 23 日の行動は、やはり多くの市場筋が指摘する「レートチェック」に過ぎなかったと言えよう。

上記のような状況を踏まえた、ここからが本題なのだが、「政府・財務省が 2 月 11 日に改めてレートチェックを行った」との思惑が浮上しているようだ。

簡単に前後の動きを振り返ると、同日は米政府機関閉鎖の余波を受け、延期となっていた 1 月の米雇用統計が発表された日時。そして、その内容はというと失業率が 4.3%へと改善、もともと注視されていた非農業部門雇用者数もプラス 13 万人と、実に 1 年超ぶり大幅増を記録している。

これを受けた市場の反応は、ポジティブ・サプライズで当然ドル買い優先。ドル/円は、短時間のあいだに 153 円半ばから 154 円台へと 1 円を超える上昇を見せたが、いきなり上げ止まると怒涛の急反落をたどっている。152 円台半ばへと、実に 2 円を超える下落だった。

この下げの背景のひとつとして、「政府・財務省が再びレートチェックを行った」ということがあったのではないかと、というわけだ。

ちなみに、こうした市場の思惑について、翌 12 日に三村財務官は「レートチェックの実施について、お答えするつもりはない」と述べたうえで、「為替動向は高い緊張感を持って注視する」と強調したことにとどめている。また、参考までに指摘しておく、日銀が発表している当座預金の残高予想から、こちらについても「円買いの実弾介入」でなかったことはほぼ明らかだ。

とは言え、正式には 2 月 27 日の財務省「介入実績」の発表まで待たねばならず、そして実弾介入が仮に実施されていなくても「レートチェック」が実施されていた可能性までは否定できないだろう。

いずれにしても、先週もレポートしたように、衆院選の選挙期間中に一部で悪意のある切り取られ方をして拡散した「高市首相が円安を容認している」との見方は、「大ウソ」だったと言ってよい気がしてならない。まさに油断は禁物なのだが、前述した 2 回の「レートチェック」観測が様々な憶測を呼び、ドル/円の上値は重い状況がしばらく続くのではないかと予想している。

<< 米国の為替スタンスはいったいどっち!? >>

「朝令暮改」とまでは言わないものの、ウクライナ関連発言などを見ても、トランプ米大統領の発言が二転三転しブレブレなのはご承知のとおり。

しかし、そんな一貫性のない発言はトランプ氏のみならず側近たちにも広がっており、為替を中心とした金融市場関係者も頭を悩ませている状況だ。

実例をひとつ挙げると、先で取り上げた「日本の政府・財務省がレートチェックを行った」1 月 23 日から数日経過した同 28 日、米CNBCはベッセント財務長官がインタビューで「強いドル政策を維持している」と述

